

## 「翻訳の距離」と比較文学の前線

「世界における日本文学 概論と展望」にかえて<sup>1)</sup>

稲賀繁美

### 「距離をとった読解」の倒錯

「世界における日本文学の位置」を考えるひとつの切り口として、世界文学における翻訳の役割を検討したい。この二十年ほど、グローバル化がいかなる衝撃をもたらすのかが、比較文学研究においても問われてきた。一九五〇年代に成立した日本の比較文学研究の初期にあつては、欧米文学がいかに日本近代文学に取り込まれ、あるいは中国文学がいかに日本の前近代の古典文学に素材を提供してきたかの分析が主流を占めていた。外国の源泉を特定し、その日本における影響のありさまを説明することに重きが置かれた。だがこうした状況は、八〇年代以来の脱近代主義、脱植民地主義の趨勢によって大きく塗り替えられた。非西欧あるいは非規範の文学的営為に焦点が転じられ、古典や欧米の権威が疑問に付された。世界文学の舞台を見ても、国際的な文学賞受賞者は非西欧・旧植民地出身者あるいは非西欧在住者によつて代表される頻度が高まり、アジアやアフリカの著名な作家や詩人、劇作家たちが、ラテン・アメリカやカリブ海出身者につづいて世界的に認知されるようになっていった。だがそれとは裏腹に、特定の言語圏域に限定された地域市場に密着し、その外では認知されない地方作家たちと「世界文学」の担い手との格差も広がっていった。主要

言語に翻訳される特権を得た作者と、そこから除外され、あるいは地域言語の枠外に出ることを欲しない作者との仕分けが進行した。生物における絶滅危惧種の議論と同様に、文化生産においても主要言語によるヘゲモニーの進展が、希少言語およびそれを生産手段とする作者たちを、絶滅に瀕せしめる危険が喧伝されるようになった。

そうした趨勢のなか、北米の一部の比較文学者によつて「距離をとった読解」(grain reading)が推奨された。提唱者であるフランコ・モレッティによれば、それは従来の各国別の文学研究の限界を超える賢明な方策だ、というのである。「距離をとった読解」は経験主義的なデータの水準には拘泥しない理論的見識を約束するとともに、研究者や学生たちをして、特定の文学作品を生み出した地域言語への文献学的従属から開放する福音でもあるというのが、その主張であった。換言すればそれは、学術英語さえマスターすれば、それで満足すべき国際的・理論的論文を書くことができる、という片道切符でもある。

ところがここにいささか皮肉な事態が発生する。たしかに北米の理論志向の研究者たちは、原典を直接に読み解くという従来の呪縛から批判的な距離を取ることに成功した。だがそれよつて彼らは、そもそも自分たちが依拠している米語の翻訳というものが原典に対していかなる犠牲を強いているものか、英語至上主義の学術が、従属的な

立場におかれた言語に対していかなる「象徴的暴力」(ピエール・ブルデュー)を及ぼしているのかを公然と見落とす権利を行使することになったからである。そもそも「距離をとった読解」は(フレデリック・ジェイムソンによれば)西欧の形態面での影響が地域的な素材にいかなる妥協形成を求めるかを研究するのだと主張したものであったはずだ。だがそうした名目とは裏腹にも、「距離をとった読解」はそうした妥協が形成される現場を取り逃がす権利を自らに与える結果となつてしまった。(ジェイムソンの弁証法を是正したフランコ・モレットティに言わせれば)欧州原産のプロットと地域ならではの登場人物に地域性豊かな発話態という三つ巴の相互作用を究明することを自らの目標として掲げながら、「距離をとった読解」はまさにそれが究明することを目的としていたはずの、「断層」や「不連続線」が発生している世界文学の創作現場へのアクセスを自らに禁じる、という倒錯を引き起こした。

### 地理学的想像力から地学的想像力へ

この文脈で引用しておくに値するのは「文化理論と翻訳についての多言語誌」と銘うたれた *Traces* 創刊号の「序」に記された一文だろ<sup>36</sup>。それを強引に要約しよう。近年にいたるまで学術の世界では、周縁圏の経験主義的な生データが西欧の学術的中心地へと集積される一方、「理論」と呼ばれる西欧原産のテンプレートあるいはOSが周縁地域に対して伝播され、強引に適用されるとい<sup>37</sup>、双方向の情報の流れが支配的であった。後者の「理論」なるものは、地域から到来する生データを直接理解することは放棄する一方、その代わり

モレットティに言わせれば、原典と翻訳文との顕微鏡的比較は、著しく微細な規範に依存した「原典精読」の一変種に過ぎない。だが人類が体験した地球規模の地震という文化的地殻変動の振幅と波動をもっとも精密に計測しているのは、翻訳という名の記録である。アビ・ヴァールブルクの比喩を用いるならば、翻訳には原典の死後の生 *Zachleben* が、情念定型 *Pathos formel* として刻まれている。そして「世界文学」を標榜するのは「標的の言語」(たとえば英語)に訳された文学作品ではない。むしろ原語原典と翻訳作品とのあいだの乖離や断絶にこそ、世界文学なるものが架橋すべく奮闘するようにと運命づけられた「距離」というものが測定される。

地域の文学的な実践と、今日のいわゆる全球的な世界的認知とのあいだには、つねになんらかの「距離」が残っている。そしてこの距離は、きわめて大まかにいって、翻訳作品が達成すべき「渡り」*inigation* の努力の大きさ、困難さに比例するものだろう。そして翻訳を通じた意味の「渡り」には、つねに利潤とともに損失が背中合わせになっている。以上の「理論的」な考察の意味するところを示すために、残る紙面では、平安朝の宮廷に仕えた女性、紫式部(九七〇年頃—一〇一九年頃)によって、今からちょうど千年ほど前に完成されたとされる『源氏物語』から、たったひとつの例をとりあげて検討したい。

### 東アジア前近代のパランプセス

西洋紀元でいえば一〇〇八年から数年のうちに完成したと推定される『源氏物語』は、現代の視点からは卓抜な心理分析に富む大河小

原産地に不案内な享受者にも地域産品を理解可能な形へと加工する権威と力能とを誇示する。「理論」はいわゆる「西洋」*The West* 圏に属するものであり、それは生データを供給する「残余」*The Rest* の圏域と区別される、というわけだ。これをさらに敷衍してナオキ・サカイは「理論」とは西欧人文学 *humanitas* の領分であり、そこに周縁から集積される人類学的データは *anthropos* として前者に用立てられる、という差別構造が温存されてきたことを声高に糾弾する。はたしてフランコ・モレットティとナオキ・サカイの見解はどこから齟齬をきたしているのか、という問いは、ここでは問題にすまい。

ナオキ・サカイはここで「西洋とその残余」との領土紛争を理解するうえで「地理学的モデル」を提唱している。これに対して本論では先述の「断層」や「褶曲」がいかに翻訳行為のなかで発生しているかを理解するために「地学的モデル」を提唱したい。というのも断絶線が発生するのは、政治地理学的な国境線上ではなく、地域的な産品を全球的な市場に通用するような商品へと鑄直す変成過程においてのことだからである。地域的な利害と普遍志向の野心とのあいだの揺らぎは、気象学の比喩を用いるならば、気圧の異なる気団同士の間突において発生する雷雨や放電現象に相当する。国民主義・国家主義・民族主義のみならず反民族主義や脱民族ナショナリズム、さらには超国家主義に至る振幅を示す圧縮融合現象は、地殻変動にともなう化学的変性作用として理解できよう。サミュエル・ハンチントンの「文明の間突」モデルをもじることが許されるならば、そこに見られる断層や褶曲を説明するにも地学的想像力が要請されよう。こうした変動の前線において、翻訳はその生々しい断層映像を提供する。

説とも評され、二〇〇八年にはその千年紀が寿がれた。定家以来の整理に従えば五十四帖を数える筋立てのうちの三十六帖、「柏木」では、主要登場人物・柏木が、一人息子の薫を遺して死去する。薫は柏木と女三宮との不義の交わりから誕生した遺児である。女三宮は源氏の愛人であったから、柏木は露見した秘密を源氏から押捺されて懊惱し、悔恨と恐怖に責められる。薫の五十日の賀のおりには、苦惱に打ち拉がれた柏木は、すでにこの世の人ではない。赤子の住まいを訪ねた源氏は、あたかも薫をわが子のごとくに慈しむ。だが源氏は許されざる真実をすでに知悉していた。

ここで日本の女流作家は源氏をして偉大なる中国の詩人、白楽天(七七—八四六)に由来するふたつの引用を口ずさませる。言忌みの日なので包み隠しての表現なのだというのだが、それは「静かに思ひて嗟くに堪へたり」、「汝が爺に」という断片的なふたつの詩句である。この部分は古典的な名訳として著名なアーサー・ウェイリーの訳からは完全に脱落している。いまロイヤル・タイラーによる新訳の該当箇所をみると、前者注には『白氏文集』二十八章二十一節からの引用とあり、後者についても同様との注記がなされている。<sup>38</sup>

唐代の詩人の原典では白居易は五八歳にして得たわが子に、謙遜と恥じらいからか「自分の父に似ることがないように」と論ず。こんな老齢になって子をもうけるような仕儀は繰り返さぬように、との願いだろう。だが光源氏の囁きでは、同一の詩句の、それも断片は、はるかに複雑な含意を担わされている。表面的にみれば源氏は薫がその実の父である柏木の容姿を帯びることを恐れている。世間に知られてはならない秘密が露見することとなるからである。だがより深い次元で

源氏は「自らの子」がその「父」の悪しき前例を繰り返すことがないようにとも願っている。それは実の父である柏木の行いを咎めるには留まらぬ。源氏は、自らが柏木に劣らず不貞の輩であることを知っている。自らも父である天皇に偽って女御に子を孕ませた前歴をもつからである。源氏自らの背信は、柏木の裏切りによって報いをうけ、この罪業の因果のうちに源氏も柏木も絡み取られていたのである。

だが源氏のふたつめの科白を白居易の原詩と比較してみると、さらに恐るべき事実が判明する。紫式部は引用から意図的に重要な一行を削除していた。ふたつの引用に挟まれた詩句には「一珠甚小還懸」とあった。子は真珠のごとく美しく小さい。ならばこそハマグリを恥ずかしいと思う、というのだが、この謎めいた詩句は何を意味するのか。

この詩句を平安朝の女性作家がわざと脱落させていたことは、つとに知られていた。だがその内実に迫ることを、従来、日本の国文学者は忌避してきた嫌いがある。ところが日本比較文学会の前会長、中西進博士はこの禁忌を破り、この削除された詩句に目も覚めるような鋭利な解釈を与えている。その名文を、ここでは欧文脈に敷衍しよう。真珠は二枚貝の殻のなか、軟体動物の唇を思わせる肉塊に愛撫されて育まれる。赤子の無垢な美しさと、醜悪でグロテスクな形なさぬ貝の肉との対比。このほとんど戦慄的にまで性的な光景は、源氏にみずから情欲が招いた因果を想起させる。これこそ紫式部が読者に伝えようとしたメッセージだった。だがこの禁じられた表象を彼女は徹底も記述しようとはしない。彼女はこの詩句を抹消してしまっただけから。しかしながらこの記述の回避、すなわち沈黙によって、この真実はかえって密やかに表層に浮上し、人間の業のまことが露呈する。

り出してみせたといつてよい。加えてこの女流作家は、秘密を覆い隠すことが自らの文学創作に、原典をひとつ上回る次元を授ける術となることにも通じていた。だが彼女はさらに恐るべきことに、そうした秘密への通曉ぶりそのものをも覆い隠し、自らの才能の露見を周到に避ける。こうして彼女は、白居易からの引用をわざと隠蔽したという秘密をもほとんど隠しおこせる韜晦に、まんまと成功を収めたのだ(タイラー訳の説者も、その注から作者の秘密にまでは迫りえない)。だがこの隠された詩句こそが、『源氏物語』という長大なロマンの建築としての脊梁をなすものだった。というのも、光源氏と柏木との二重に絡まっていた(広義の)近親相姦の禁忌 incest taboo の侵犯から、物語のすべての結構が展開する運命にあったのだから。

ここに十一世紀の日本の皇帝の女官が九世紀の中国唐代の大詩人と密かに取り持った交渉、あるいは文学的な陸言の一斑が暴かれたといつても過言ではあるまい。中国原典と日本語による引用と、そこに介在する翻訳の操作のうちに、顕示されたというよりは逆に隠蔽された、ほとんど不可視なこの逢う瀬——それによって中国古典は前近代の東アジア文学交流圏にあって、日本列島のひらかなによる文学創作へと架橋されていた。オリジナルの変貌は、これみよがしな見せびらかしとは無縁の慎み深さをもって、それも原典の切除という否定的な方法によって、沈黙のうちに達成されていた。ここで翻訳は、原典の決定的な詩句に消印を施して、それを拭き去ってしまったわけだが、この犠牲を代価として跨がれた距離ゆえに、白居易の原詩は極東の列島であらたな生命を得た。そしてこの変身は「渡り」の到達地の文学的経緯を豊かにした。その様相にこそ、世界文学の生き様 *modus*

無垢な赤子を生む大人の醜悪さ、やがてこの赤子をも醜悪な肉塊へと変貌させる歲月の無慈悲な残酷さ、そうした人間の命運がここに情け容赦なく照らしだされる。紫式部は、白居易の詩をあえて抹消するという手段に訴えることによって、人間存在がその皮膚の下に押し隠している醜さを、読者に訴えかけた。これこそ彼女が『源氏物語』と呼ばれる作品にひそかに忍ばせた「隠し刃」だった、とするのが中西教授の読解である。

#### 不死鳥の渡りとしての翻訳

紫式部の同時代人や直後の世代の文人たちは、紫式部が白楽天の詩を引用したことのみならず、そのなかで彼女が巧みに最も勘所となる一行を取って注意深く削除したことも、容易に理解しえた。宮廷の女流作家はそれを前提として小説を執筆したはずである。ここには極東の古典における *palimpsest* の実例をみることができる。パランプセスとは西洋で羊皮紙を再利用する際に、抹消した以前の文章が透けて見える状態で残ったものを意味する。同様に日本の中古文学にあつても、抹消の痕跡から、そこでなにが隠蔽されようとしていたかを見て取ることができる。中西進博士はそこにあやまらず紫式部の「隠し刃」を認めた。沈黙の策術は、文言を費やした執拗にして雄弁なる記述よりも、はるかに恐るべき効果を発揮する。漢文の翻訳に際して、引用に隠れ蓑を施し、原典を消去する。これによって紫式部は、露骨に指し示したならばほとんど猥褻といつてよいエロスを隠し込んだ原詩を、不可視の状態で読者に指し示し、削除によってそれをさらに彩かに炙

*ivants* を見てとることが許されよう。ここで「世界文学」とは、絶えず移動変転し翻訳される生の徴、文化を跨ぐ「渡り」のうちに出現する実相として再定義することができるだろう。

『源氏物語』の漢籍引用も広義の翻訳作業の一斑をなす。そして翻訳とは、しばしば原典に危機的なまでの損傷を与え、理不尽な犠牲を強いる営みである。受け手の側で高く評価された翻訳が、原典の側からみればもはやそれと認識することも不可能なほどの改変や破壊を代価になされた場合も稀ではない。だがこの絶えることなき妥協と変容、さらには輪廻転生(というのも、我々は定義からして自分が誰の生まれ変わりかは、知ることができないのだから)——その無限の連鎖反応のさなかに、「世界文学」は不死鳥よろしくその姿を現す。薫が誰の子か認知されてはならなかったのと同様、紫式部の物語が効果を発揮するためには、その文学的な源泉は周到に翻訳から取り除かれねばならなかったのである。

「不死鳥はつねにあらたな方角にむけて飛翔する準備ができている」(モレットイ)。とすれば「世界文学」と呼ばれる営みの射程を測定するために、そして「世界における日本文学の位置」を問うために、いまあらためて要請されているのは、モレットイが提唱するような、原典から「距離をとった読解」 *disant reading* であるまい。今要請されているのは、我々がここでごく慎ましく提唱したような、原典と翻訳との間の距離を読む *distance reading* の試みであるはずだ。

注

- (1) 本稿は編集部の要請により、*Old Mayjins and New Centers: Legacy of European Literatures in A Globalized Age, Ancientms Frontières et Nouveaux Centres : L'héritage littéraire européen dans une ère de Globalisation*, ICILA-ALLC, University of Brussels, Université libres de Bruxelles, Aug. 26-28, 2009 による発表原稿(英文・仏文)を紙面の許す範囲内で日本語に翻訳したものである。詳細な注は、刊行予定の欧語論文を参照されたい。
- (2) Franco Moretti, "Conjectures on World Literature," *New Left Review*, No.1, Jan.-Feb. 2000, pp.54-68.
- (3) Naoki Sakai, "Introduction," *Traces, A Multilingual Journal of Cultural Theory and Translation*, n.1, s.d., p.v; "Dislocation of the West," p.74.
- (4) *The Tale of Genji*, translated into English by Royall Tyler, Penguin ed. 2001, p.767.
- (5) 中西進「紫式部と白楽天」『ひまわり』二〇〇八年一月号、二六―二七頁。
- (6) なお大澤吉博「共通言語・支配言語と比較文学」(二〇〇四年)『言語のあいたを読む』思文閣出版、二〇一〇年、四五頁以下参照。大澤氏が健在であれば、本章はその執筆に委ねられるべきものであった。